

学会珍風景ほか



札幌市医師会
平松記念病院

町田 莊一郎

一般演題を若手医師が発表後、座長からフロアに質疑を促したが、フロアから手を上げる人は誰もいなかった。そこで座長から質問したが、返答に困っている様子なので、言葉を替えて質問し直したが、壇上でもじもじするばかりで、一言も声を発しなかった。フロアに共同演者がいるはずだが、答える人は誰もいなかった。ややしばらくして座長は演者を解放した。フロアでその様子を見ていて、私も体を硬くしていた。

大学にいた頃、学会にはよく出席し、一般演題の発表を何度かしたことがある。質問されても、幸い立往生することはなかった。

またあるセクションで一般演題を若手医師が発表した。フロアから質問が出た。それに対する演者の言い分がふるっていた。

「私はこの内容について何も知らない。ただ、発表しろと言われて発表したまでだ」

これを聞いてフロアにいた主任教授があわてて立ち上がり「失礼しました」と苦笑しながら謝り、質問者に対して解答した。

何回か学会に出席していると、たまにはこのような風景にお目にかかる。フロアでぼんやり演題を聴いていて、このような風景に遭遇すると目が覚める。

これからは学会とは関係のないお話。若さゆえに起きたこと。

誠・みさお夫婦と信夫・こずえ夫婦が海外の新婚旅行先で親しくなった。8日間の日程で、ある地で3日間滞在し、その間いっそう親密になった。旅行が終わって、みさおは両親に挨拶に行った。ところが連れてきた男性は新郎ではなかった。信夫とみさおが意気投合し、旅行先で鞍替えしてしまった。

これは私が海外旅行をした時、添乗員から聞いた話である。

もう一つ別のお話。

大学医学部を卒業した彼は1年間のインターン生活を関西の病院で送るため、青森に向かう青函連絡船に乗った。出航後彼はデッキに出た。春風はまだ少し冷たかった。近くに若い女性が現れたので、彼はその女性に話しかけた。最初とりとめのない話をしてしたが、彼はインターン生で、これから関西の病院に赴く途中だと打ち明けた。彼女は東京へ行く予定で、近く結婚するフィアンセの男性と一緒にとのことだった。フィアンセは客室の畳で眠ってしまっ

たので、デッキに出てきたのであった。話をしているうちに打ち解け合い、彼は彼女が好きになったと告白し、一緒に関西まで行こうと言った。いきなりそんな話をされたので、彼女はうろたえてその場を去ろうとしたが、彼はその腕を放さなかった。彼はこんなに女性を好きになったのは初めてで、どうしても放したくないと懇願した。彼女の方もこのように激しく愛の告白をされたのは初めてで、気持ちがぐらつき出した。真剣そのものの彼の目つきにほだされてしまい、彼について行くことに決心した。彼女は自分の小さいスーツケースを取りに行ったら、フィアンセは目を覚ましていたので、化粧直しをしてくると言ってその場を離れた。2人はなんとかフィアンセの難を逃れて、青森駅で関西行きの列車に飛び乗り、列車が出るのを待った。列車の中にキョロキョロまわりを見回している男性が来たので、彼は彼女を座席の下に隠し、近くの客にも協力してもらって見つけさせなかった。その男性、フィアンセらしかった。彼は男性が下車して別の列車に向かったのを確認した。やがて列車は出発した。彼は協力してもらった客に事情を話した。皆面白がり、彼女をしっかりとつかんでいるように励まされて、笑いの渦に包まれた。一連の騒動で2人はぐったりし、朝まで眠ってしまった。

関西の宿舎に着いて、2人は初めて互いに自己紹介した。

